

しましたか。

ロ、「オトナリノ前」「ボチ、ボチ」を書取らせる。

ハ、どうしてボチを呼んだのでせう。

(健ちやんがボチを大そう好きである事を明らかにする。)

ニ、ところがボチは？

ホ、とし子さん、健ちやんの氣持は？

(二人の失望と、とし子ちゃんの落膽。)

○「ツトムサンノオウチノ前ニ……トイヒマシタ。」の取扱、

イ、それでふと向ふを見たら。

ロ、そこで馬の居る方へ行きましたね。

健ちやんはどうだつたでせう。

ハ、「オウマ、オウマ。」を書取らせる。

「オウマ、オウマ」の健ちやんの言ひ振りの想像。

ニ、掛圖提出。

○ウマハ、ヲケノ中へ……フツテキマシタ。」の取扱、

イ、馬は何をしてゐたでせう。

オトナリノ前へ「ボチ、ボチ」

「オウマ、オウマ。」

ウマハ、ヲケノ中へカホヲ入レテ

カヒバ、ヲタベテキマシタ。

ロ、「ウマハ、ヲケノ中へ……フツテキマシタ。」を書取らせる。

カヒバ ↓はひを追ふ。

トキドキシツボヲフソテの意味を明らかにする。

ハ、健ちやんはそれを見てどう思つたでせう。

(こゝが健ちやんの喜んだ點である。こゝを明らかにする。)

○ケンチヤンハ、ニコニコシテミテキマシタ。」の取扱ひ、

イ、それで健ちやんは？

ロ、「ニコニコシテキマシタ。」を書取らせる。

ハ、とし子さんの氣持は？

(とし子さんの健ちやんが喜んでくれて本當に良かった、といふ満足感

を會得させる。)

3 全文の味讀

前、後段に分けて内容を考へながら、個讀させる。

4 ケンチヤンをどう思ひますか。

とし子さんをどう思ひますか。

第四時

第五篇 實 際 篇

タベナガラ、トキドキシツボヲフ
ツテキマシタ。

ニコニコシテキマシタ。

1 朗讀

讀み得た心持を朗讀に表現させて、とし子さんの様に幼い弟や妹を今迄よりも可愛がつてあげよう、といふ氣持をおこさせる。

朗讀についての注意

斷續 「ボチ、ボチ。」はつづける。

「オウマ、オウマ。」は「オンマ、オンマ。」おいてたど／＼しく、

イラツシヤイマシタ。

イタヅラヲシマシタ。

オツシヤイマシタ。

外へ出マシタ。

ボチハキマセンデシタ。

の次間を置く。

抑揚調子

トシコチヤン はんをあげる。

お母さんの言葉はやさしく。

「ボチ、ボチ」 少し強く。

ニコニコシテ

2 練習、漢字を練習用紙へ(家庭作業補)

3 充文指導 「アカチヤン」「ウチノパウヤ」

(補充文) アカチヤン

アカチヤンガ、フウセンダマヲトラウトシテ、ゴソゴソハツテキマシタ。

フウセンダマハ、アカチヤンノ前デ、フワリフワリシテキマス。

アカチヤン、オ手ヲ出シテ、ナンベンモトラウトシマス。

シカシ、手がサハルトフウセンダマハ、フワリフワリトニゲテイキキマシタ。

アカチヤンハ、ソノタンビニ、アツブアツブトイヒマシタ。

ウチノパウヤ

ウチノパウヤハ、コトシニツニナリマシタ。マイアサワタシヨリサキニ、オキマス。

ワタシが目ヲサマシテミルト、パウヤハ一シヤウケンメイニコヒモヲマイタリシテキマス。

ワタシガ「パウヤ。」トヨブト、ハツテキテワタシノオフトンヲタタイテ「ネンネ、ネンネ。」トイツテヨロコ

ビマス。

コンドハチコチヤンノキンギヨノマクラヲトリニイキマス。

チコチヤンハ「イヤヨウ。」トイツテヒツバリツコチヲシマヒマス。

パウヤハチコチヤンノカミノケテヒツバツテ泣カセテシマヒマス。

ソシテ泣イテキルヒマニ、ボウヤハソノマクラヲヲツテキテオニンギヤウニシテ、「ネンネ、ネンネ。」トイ
ツテヨロコンデアソビマス。(ダイニ、一、ネン、カハシマトモコ作)

三、日本傳説

一、教材 卷三、十一 國びき。

一、教材觀 本文は出雲風土記の國引を略述したもので、原據は四段の反復形式をとつてゐるが之を二段となし、日本文化をお進めになつたといふ八束水臣津野命(素戔嗚尊の四世孫)の御偉業を物語つた尊い日本神話である。初め伊弉諾、伊弉册の二神が、大八洲をお生み遊ばされたが、當初は尙土地も狭く民も十分の活動も出来かねるだらうとの神様のお思召から國びきをなされ、出雲の國を廣大なされたのであつて、全く國土創造、文化進展の廣大な御偉業で我々は神様の崇高な神格に接して、その御苦心を偲び奉ると共に、其の御創業に對して感謝の念を深く捧げなければならぬと思ふ。

今教材に就いて之を四段に大別して見るに。

第一段は 餘つた土地を持つて來てこの國を廣くしようと考へになつたお心持を叙してゐる。國土擴張の思召である。「この國をもつとひろくしたい。」が神様の廣大な御精神であり、その方法として「あまつた土地……つぎ合はせる」ことをお採りになつたのである。この「あまつた土地」こそ不用な土地で、その國から顧みられない憐れむべき所で、之を攝取し抱擁して文化に潤さうとなされたのであり、實に天道になつた思召で崇高なる神格を偲び奉ることが出来ると思ふ。

第二段は この御計畫の實行である。愛國の御精神の前には「太い太いつな」「ありつたけの力」「かけこゑいさ、ましく等の御苦業もいとほれず、先づ東方からお引きになることに成功されたのである。大陸がちぎれて」「ぐんぐん」と動いて來る所に神様の偉大なお力が讀まれると思ふ。

第三段は 「しかしまだせまい。」との御遠大をお心持から更に西の方の餘つた土地を引寄せ、この國に繼ぎ合せられたことを叙し、又「力一ばい」の御苦心を反復されて、愈々御偉業も遂げられたのである。

第四段は 「どうかしてひろくしたい。」と言ふ堅いお思召が廣重なる御苦心の結果、終に成就し得たのである。國土擴張の御計畫御成就であり、又文の結ともなつてゐる。

神様の國土創造の御精神が中心を流れて御計畫となり、實行となつてゐるのであつて、國びきの御偉業は成り、我が國の今日ある基礎をおつくり遊ばされた神様の偉大なる神格に接し、更に神の創り給へる祖國を愛する情を懐かせるやう進むべきであると思ふ。

神話は本教材が始めてであるので、興味を以て讀ませ、親しみを懐かせると共に敬語に注意し之を指導しなければならぬ。

新出漢字は「國、神、土地、東、力、舟、西」の七字があり、讀替として「土、地、太」の二字が擧げられてゐる。一、目的 讀みを通して神様が國土擴張の爲に國引をされた御偉業に感じさせると共に、崇高なる神格に接しさせ祖國を親愛する情を養ふ。

尙神様に對する敬語に注意させ、新出、讀替文字の讀み書きを授ける。

一、時間配當及時間目的

第一時 新出讀替文字を中心として全文の讀みを指導し、機構を握らせる。
 第二時 一・二段を中心として讀ませ、神様の國土擴充の思召及び東の土地をお引きになつた御鴻業に感じさせる。

第三時 三・四段を中心として讀ませ、更に西の土地をお引き遊ばされて國土を擴充された御偉業に感じさせる。
 第四段 全文を總括し、神様の御偉業に感謝の念を懷かせ、祖國を愛する情を起させる。新文、讀替文字の練習をなす。

一、教授過程

第一時

1 目的指示

○「國びき」とは何のことてせう。

○誰がひいたのか、又之をどうしたのかしらべませう。

2 通 讀

○自由讀

○指名讀 新出文字の讀みに注意し、大意を握らせる。

○範 讀

板書事項

新出及讀替文字

國^{ひく}びき

3 機構の研究—筋をにぎらせる。

段 一 ○どなたが國びきをされたのですか。

○何のためにお引きになつたのですか。

○どうしたら廣くなるとお考になりましたか。

○始めどちらからお引きになりましたか。

○お引きになる様子はどうでしたか。

段 二 ○どんなにしてお引きになりましたか。

○この土地は引きましたか。

段 三 ○之でもう充分とお考へになりましたか。

○今度はどちらからお引きになりましたか。

段 四 ○かうしてお引きになつてどうしようとお考へになつてゐたのですか(一段)。

○お國を廣くする爲にこんなにお骨折になつたのですね。

4 板書事項整理

筋をはつきりさせる。

5 通 讀

第五篇 實際 篇

神さま

もつとひろく

あまつた土地

東

太い太いつな

ありつたけの力

舟のやう

西

力一ぱい

よくこのお話を憶えるやうに、讀みませう。

第二時

1 前時回想

○「國びき」とはどんなことでしたか。

○どんな土地をおひきになりましたか。

○それで之をどうしたのですか。

○易々と出來たてせうか、深くしらべませう。

2 通讀(全文)

指名讀―筋を想ひ起させる。

3 内容研究(一・二段)

○いつ頃のことですか。

○どなたがされたのですか。

○何の爲にされたのですか。

○何故廣くしたいとお考へになつたのでせう。

―神様の有難い思召を考へさせる。―

○この爲にどんな方法をとらうとされましたか。

國びき

大むかし
神さま

どうかしてこの國を、もつとひろくしたい。
あまつた土地

○「あまつた土地」とはどんな所でせうか。

―憐れな土地を文化に潤し、更に日本の爲にも有効に使はうとされた思召に注意。―

○どこでおさがしになりましたか。

○すぐ見つかつたてせうか、どちらの方にありましたか。

○神様はそれをどんなにしてお引きになりましたか。

―挿繪觀察、朗讀指導、御苦心の様子に感じさせる。

○すぐ引いたのでせうか、どこか分る言葉は有りませんか。

○土地はどうでしたか、來る様子はどんなでしたか。

―神力の偉大さに感じさせる。―

○土地は來ましたが、始めのお考へはどんなでありましたか。

―一段にかへり深い思召に感じさせる。―

○之で充分とお考へになりましたか。

―三・四段への連絡。―

4 板書事項整理

神様の思召、及び一次の國引の様子を考へ直させる。

つぎあはせる。

東の方のとほい國

↓○太い太いつな

↓○ありつたけの力

「こつちへ來い、

えんやらや。

こつちへ來い、

えんやらや。」

↓○かけこゑいさましく、

大きな舟のやう、ぐんぐん

5 範讀—朗讀指導

第三時

1 通讀—既習事項を想ひ出させる

2 前時回想

○神様が國引をされたのはどう言ふお考からですか。

○それで先づどちらからお引きになりましたか。

○之ですつかり廣くなつたのでせうか。

3 通讀—三段・四段

4 内容研究

○未だ充分でないとお考になつて、今度はどちらにあつたてせう。

○神様は又どうされたてせう。

○お引きになつた様子はどんなでしたか。

○このつなはどんな綱てせう。

○力一ぱいとはどんなことですか、他に言ひ方はありませんか。(ありつたけの力)

○そしてかけ聲は。

國びき

この國をもつとひろくしたい。

(東)

しかしまだせまい。

(西)の方

つな

力一ぱい、

かけごゑいさましく、

また海の上

こんどは西

やはりあまつた土地、

その土地にも

これも大きな舟のやうに

○今度もお考へ通り引けたてせうか。

○今度も東をお引きになつた時と同じ様子ですね、同じ事ですが二度目を

表はす言葉が分りますか(表現上の研究)。

○斯うして二度もご苦心されましたが何の爲になさつたのでしたか。(一段の話し合ひ↓四段の結語へ)

○「といふことです」とはどんなことですか。

語り傳へられた神話であることを知らせる。

5 通讀—味讀せしむ

6 板書事項整理

7 前文通讀

第四時

1 全文通讀

2 既習、研究事項の整理

○國びきをされた動機は、どんな思召からですか。

○どんな方法がよいとお考へになりましたか。

○「あまつた土地」はどちらにありましたか。

(日本)國をひろくしたい。

あまつた土地をつぎあはせる。

○お引きになる御苦心は―通讀。

―東西とお引きになつたことをまとめて考へさせ、御苦心の様子を讀ませ、その反復形式の變化に注意させる。―

○「かうして」廣くして下さつたと云ふお話を讀んで考へたことが有りますか―感想發表。

3 全文通讀

○指名讀―神様の有難いお心持や、御苦心がよく分るやうに讀んでごらん。

○範 讀

4 新出讀替文字の練習

書取、假名付け―篇について。

備考

1 難語句に就いては、折々に扱ひ短文をつくる初歩指導をなす。

2 敬語に就いても折々に普通文と對照させて指導をなす。

尋二 五かぐや姫指導案

一、教材觀

竹から見出された、かぐや姫が世の憧憬を一身に集める美しい娘となつたが遂には悲しみの別離をしなければ、

ならなかつたといふ美しくも憧れの物語である。

「盛者必滅會者定離」古人のことはも哀れに二十有餘年の長い恩に泣く、かぐや姫も悲難にくれる二人の親を残して昇天して行く世の常とは云ひながら月を見て泣きつゞけるかぐや姫、かへしてなるものかと別れを悲しむお爺さんとお婆さんこそ眞に哀れな姿である。姫がお爺さんお婆さんの長い間の眞心に愛着の念たちがたく―皆さんにお別れるのがつらくて泣いてゐるのでございませうと月を見ては泣き、又々「むかへに來ても渡すものか」と別離を否定する二人共に美しい人情が溢れ―そう此の別れに哀れの涙を誘ふのである。

しかし人間の之を止める業もなく、遂に世人の名残に送られ二人の涙を饑として去つて行つた。空の彼方に我々は如何なるものを發見するか、かぐや姫が今はのきはに二人に残した一月夜の晩には、どうか私の事を思出して下さい」の言葉こそ眞に味はふべき言葉である。

唯二人に止らず、世の人々に送つた言葉ではないか。

唯理想を地上にのみ求めて來た地人に「天上といふ美しく清い世界がある」「人の世界を超越した高くて美しい月の世界を仰いで心を清め高めよ」との深い暗示を含めた言葉と考へられるのである。

表面を流れる哀離の情のうちに、かうした流れのあることを見のがす事は出來ないと思ふ。

續いて構想を深めて行つて見ると。

(1) 竹取の翁の生活(二十七頁一行まで)。

(2) 翁が竹の中から見つけた女の子を愛育した(二十七頁二行から二十八頁五行まで)。

(東)

○太い太いつな。

○ありつたけの力(力一ばい)

○かけごぬいさましく。

(西)

- (3) 翁が金持になつた(二十八頁六行から二十九頁一行まで)。
- (4) 女の子の成長と命名(二十九頁二行から六行まで)。
- (5) かぐや姫に對する求婚(二十九頁七行から三十一頁一行まで)。
- (6) 惜別の情(三十一頁二行から三十四頁四行まで)。
- (7) 別離昇天(三十四頁五行から終りまで)。

以上七段より成り第一段には翁の日常の生活を叙しこの翁は、かぐや姫の「お別れするのがつらくて」お別れ申すことはまことに悲しゆうございます」と悲しみの聲を發せしめた慈愛深いお爺さんである。

更に二段に、此の翁の慈悲深い事の一端が現はれてゐる。

三段は女の子を育てた報として、だん／＼金持になつた事を叙し、四段に至つて不思議な成長と命名を叙し「光つてゐた」「美しい娘」によりかぐや姫、命名のいはれもうなづかれる。

五段はかぐや姫への諸方からの求婚であり「じぶんがむこにならう」「私のよめに下さい」と申しこんだのも殿様から「おく方にしたい」との御言葉の有つたのも凡てかぐや姫の美しかつたのを表したものであり、之等の求婚に對して、凡て斷つた所に姫のたゞならぬ態度がよまれ、すてに還るべき時の來ることを知つてゐたことも想像出來るのである。

次の六段は哀別の情を叙したもので「みなさんにお別れするのがつらくて泣いてゐるのでございます」にかぐや姫の人間的情が溢れその裡には、お爺さんお婆さんの慈愛深い心持も知ることが出來ると思ふ。尙「それは大へ

んだ、むかへに來てもわたすものか」と云ひ「何とかして、ひき止めたい」といふ言葉に姫をはなし難い老夫婦の情がよまれるのである。

最後の七段は愈々別離の場面でも最も重い意を含む所である。

殿様からの兵たいの力も如何とも、し難く「今はしかたなく」と會者定離の理をわきまへたかぐや姫が一月夜の晩にはどうか私の事を思出して下さい」と最後の言葉を殘して昇天したのである。

以上七段にわたる悲しみ、美しさの中に更に興をさそふもの、それは一光つた竹から出た小さな女の子「お爺さんの切る竹からは、何時もお金が出て來ました」「三月ほどたつと十五六ぐらゐの美しい娘になりました」「兵たいたちは弓に矢をつがへようと思いましたが、目がくらんでどうすることも出來ません。」「天人のよういして來た車にのつて空へ上つて行つてしまひました」に表れるかぐや姫の急激な成長、その還るのを防がうとする兵たいの無力等神秘的な場面である。この不思議が織りなされ「そう趣を深くし我々の憧れを誘ふのである、不思議な美しさの中に充分したらせて讀ませ輝く空の彼方にその姿を見送る時、其處に起るものは、かぐや姫の憧れの心であり、月の世界への憧憬心である美しい悲しい物語の中に、この心の湧くのを見ることが出來るならば、かぐや姫の使命と共に本課の意圖も全うされる事と思ふ。

一、目的

讀みを通して傳説「かぐやひめ」の物語に興味をいだかせ、美しい姫と慈愛深いお爺さんとお婆さんとの哀別の情に感じさせて月の世界に對する憧憬心をおこし心を清め高めて向上せんとする心持を養ふ。

尙新出讀替文字の讀み書きを授けると共に、雜語句の意義を授ける。

一、時間配當

第一時 一段から五段(三十一頁一行まで)の讀みの指導を中心として新出讀替文字の讀み書きを授けその筋を握らせる。

第二時 六、七段(三十一頁二行から終まで)の讀み指導を中心として新出讀替文字のよみ書きを授け後半の筋を捉へさせる。

第三時 一段から五段までの深究をし、かぐや姫の美しかつたことを讀みとらせる。

第四時 六段(三十一頁二行から三十四頁四行まで)の深究をし、かぐや姫とお爺さんお婆さんとの惜別の情を讀みとらせる。

第五時 七段(三十四頁五行から終まで)を深究し悲しみの中に姫が昇天したことを讀みとらせ、別離の情に感じさせ月の世界への憧れの心を向けさせる。

第六時 全文を總括し最後の姫のことばを中心として月の世界への憧憬心を起させる。尙漢字語句の練習をする。

一、教授過程

第一時

板書事項

1 目的指示

2 通讀—自由讀、範讀、指名讀

かぐやひめ

讀み方指導中心。

3 通讀、指名讀

○今日の所には、どんなお話が書いてあるか考へて下さい。

4 筋の概觀—漢字の讀み書きを指導しながら

○かぐや姫はだれに見つけ出されたのですか。

○この人は何をしてくらしてゐたのですか。

○どこにゐたのですか。

○この女の子をどうしたのでせう。

(そだてましたとは)

○それから、お爺さんはどんなになりましたか。

○この女の子はどんなになりましたか。

○それで何といふ名をつけましたか。

○美しくなつたのでどんなことが起りましたか。

(むこ、よめ、おく方とは)

○この申込をどうしましたか。

(しようちしません、おことわりとは)

おぢいさん

竹

女の子

お金持

美しい娘

世間

申しこみました

5 整理—板書事項整理、筋の把握

6 通讀

第二時

1 前半通讀

2 復習問答

○かぐや姫はどこから出ましたか。

○そして、どんな子になりましたか。

○之からどんな事がおこるでせう。

3 通讀(後半)—自由讀、指名讀

讀み指導中心

4 範讀

○どんな事がおこつたか考へて下さい。

5 筋の概観—漢字の讀み書きを指導しながら

○かぐやひめにどんな事が起つて來ましたか。

(ながめてとは)

○どうしてでせう。

(つらいとは)

○お爺さんはそれを聞いて、どうしましたか。

○見事に使を追ひかへす事が出來ましたか。

(つがへるとは、目がくらむとは)

○とうとう天へ上つて行つてしまひましたね。

6 整理—板書事項通讀、筋の把握

7 全文通讀

第三時

1 全文の通讀—機構の想起

○かぐや姫のお話を思出しながらきませう。

(指名讀)

2 本時の目的指示

○かぐや姫は、どんなになりましたか。

3 五段終りまでの通讀

○自由讀、指名讀。

4 内容の研究

かぐやひめ

晩

十五夜近く

月の都

世界

お別れ

兵たい

追ひかへして

夜中

弓矢

上つて

かぐやひめ

竹取のおきな

おばあさん

光つてゐる竹

小さな女の子

よろこんでそだてました

いつもお金

だんぐりお金持

○かぐや姫は誰に見つけられたのですか。

○何時見つけたのでせう。

○どこから見つけましたか(もとっは)。

○わつてみますと。

○お爺さんの心は、そしてどうしたのでせう。

(齊讀)

○この子を見つけてからどんな事がありましたか。

○なぜお金が出たのでせう。

○それから女の子はどんなに、なりましたか。

(かぎやひめの名の意義について) 指名讀。

○こんなに美しくなつたのでどんな事か、おこりましたか。

(齊讀)

○人々の申こみにたいして何と申しましたか。

しようちしません。

おことはりいたしました。

○どうしてみんながこんなに申しこんだのでせう。

美しい娘

世間の人々

むこ、よめ

とのさま—おく方

5 板書事項の整理

小さな女の子がお爺さんお婆さんの愛撫によつて、美しい娘になつたことを
まとも月の世界の人への憧れの心をおこさせる。

6 範讀

第四時

1 前時回想。

指名讀。

内容問答。

○かぐや姫はどんな子になりました。

○美しかったことは、どんな事でわかりますか。

○皆ことはつてゐたのが世の中の評判だつたのですね。

○本時への誘導。

○こんな美しい姫を二人は、どんなに思つていたでせう。

○姫は二人をどんなに思つてゐたでせう。

○美しいのは姫の姿だけですか。

2 六段通讀。

第五篇 實 際 篇

かぐやひめ

美しい(すがた)心

月のあかるい晩

十五夜近く

こゑをたてゝ泣いてばかり

月の都

月の世界からむかへ

お別れ

○大へんだ

自由讀 節意を捉へさせる—發表。
指名讀

3 研究

○かうしてとはどんなことですか。

○姫にどんな事が、おこりましたか。

月のあかるい晩—どんなことかんがへ

十五夜近くなると—泣く ← 何故てせう

← 姫のことは

○月の都とは、どんな所ですか。

○この姫の心が分りますか(朗讀指導)。

○何故別れが、こんなにつらいのですか—美しい心

(二人の慈愛の心をよませ、かぐや姫の情に感じさせる)

○之をきいたお爺さんは、どうなさいましたか

○とのさまは、どうなさいましたか—通讀

(老夫婦の心に同情して)

○何故そんなにまでして、ひき止め様としたのですか

○何とかして

兵たいをたくさん

追ひかへして

4 板書事項整理

(夫婦の別れ得ない人情にかんじさせる)美しい心。

○この老夫婦の心を表はすことはは。

○かぐや姫の心を表はすことはは。

○それでも月の世界の者であるので別れなければならない時が来るのです
ね。

5 通讀—範讀

第五時

1 前時回想

○指名讀

○復習問答

○おぢいさんの心、姫の心はどんなでしたか。

別れる時が近づいて来た時、どんな心になりましたか。

2 通讀—指名讀、自由讀

3 研究

○かぐや姫をひき止める爲に、どうしましたか。

かぐやひめ

十五夜の晩

兵たいがいくへにも

目がくらんで

どうすることも

今はし方がなく

○家のまはりを取かこんでゐると、いよ／＼その時が來ましたね、邊りは
どんなになりましたか。

（いくへとは、とりかこむとは）

あかるくお月さまが十も……

○待ちかまへてゐた兵たいは、どうしましたか。

○使を、追ひはらふことが出來ましたか。

（天の力には人力も勝てない）

○とう／＼別れなければ、ならなくなつた時、かぐや姫はどうしましたか

—朗讀指導

（月を仰いで私の事を思出し、哀愁を忘れてくれと云ふ意を、
ほのめかしてゐる、本文の中心語句である。）

美しい姿

かぐやひめ—月への憧れ

美しい心

○この言葉を残して天へ行つてしまひましたね。

おぢいさんおばあさんはどんな心で見送つたてせう。

挿繪觀察—音楽、月

○「月夜の晩にはどうか、私のこと
を思出して下さい。」

「ご。お。ん。は。は。ひ。つ。し。て。」

空へ上つて行つてしまひました。

美しくも悲しい昇天

悲しげに見送る老夫婦、本課の山である

○この場面を見て何か考へた事がありますか

4 通讀—指名讀

○この心持を考へながらよんで、いたゞきませう

5 整 理

月の上つて見えなくなつた時、老夫婦はどうしたてせう

○それから後二人はどうしてくらしたてせう

（かぐや姫を思ひ月の都の生活を思出したにちがひない）

6 板書事項通讀

第 六 時

1 全文通讀—指名讀

2 感想のまとめから文のまとめへ

○どこが一番すきてすか（別れ）

○この文のどこに現れてゐますか（六七節通讀）

○老夫婦の悲しんだのは何故てせう

別れ

おぢいさん—おばあさん

そだてました

美しいすがた

美しい心

○この二人はたゞ悲しく思つたゞけてせうか

○最後のことを考へてごらんさい

○美しい月の世界の事を考へたてせうね

3 範讀—朗讀してこの心持をまとめる

4 朗讀練習

かぐや姫のことは、お爺さんのことばに注意して特に「月夜の晩には」はゆつくりよむ。

5 漢字練習 語句練習

そだてる、申しこむ、しようち、ことわる、つらい、何とかして、ひきとめる、今はし方がなく、どうか、けつして等。(終り)

四、日本神話

一、教材 卷五、第十三少彦名のみこと。

一、教材観

神話「天の岩屋」に次いで「八岐のをろち」が出され今又茲に、をろち退治の主人公素戔鳴命に最も御關係の深い御子大國主命に因んで「少彦名のみこと」を提出されたことは連絡上から見ても印象を深くする上にも興味を添へる上にも意義と効果を多くするものと思はれる。「少彦名のみこと」は神産巢日の神の御子であるから其の關

係が「層親しい」さらに二十課の「天孫」へと進展して配當されて居るが、いづれも國土經營を内容としてゐる。

本教材は童心觸發を第一義としつゝ少彦名命の眞面目を描き出した興味深いもので古事記などの原據の生命を如實に活かして一層日本神話の輝きがある様に思はれる。

私はこの課を讀むと尋二讀本卷三、「國引」のあとを受けて居る様な感じがする闘争もなく只々國土經營一心のうるはしい神話の様考へられます。大國主命と心を合せて御經營、設計は少彦名命現場は大國主命があたり給ひしかとも考へられる。

古事記や日本書紀を見ると、大國主命は大そうお喜びになつて、少彦名命をおうちへ、おつれになつたまでは古事記により、國土經營と、この地を去りたまふ所は日本書紀によつた様に思はれる少彦名みことは虫の皮を着物にして着ていらつしやる少さい神様で豆のさやのやうな物を舟にしてお出でになつたのだから一寸法師の話でもなく、まさしく

一神産巢日の神の御子で、漂然と來り漂然と去り給ふ所全く國土經營を其任としたまふ神と思はれる一

大國主命が出雲の美保崎においてになつた時の事で或日海岸を歩いて、いらつしやると遙か沖の方に人の聲がしたので驚いてお探しになつたが姿が見えない、暫くすると羅摩(カガイモ)の皮を舟として蛾の皮を剥いて着物とし少さい人が潮のまに／＼こちらへ來たと云ふ様な原據の内容を童話化したもので、あるから少彦名の命が大國主命と協力して田島を開いたり、道路をつくり、橋を架けたりして國土を開拓なさつたこと人間や家畜の病氣などまで治療なさつた智者の神専ら治國富民の實を擧げられ更に新らしい國の開發を志し名残りを惜まれる大國主

かなしみ

私のことを思ひ出して

○月

○かぐやひめ

命と別れをつけ飄然と行衛も知らずお出ましになつたのである。
新味の横溢せる童話的神話且つ知者の光と徳の恵みによる生々發展の興國的氣分の漲つた教材こそ生々發展其のものゝ様な生命に生きる兒童にとつて心靈の糧となるよい教材と思ふ。

一、各節の構想

第一節 自は 自は 波の上に小さいも。

大國主みこと 波の上 小さい物 何だらう。

第二節 自五八頁七行 誰だか分らない。

小さい神様 誰だか分らない。

第三節 自六〇頁六行 誰だか分らない。

ひきがへるよい所へ来た 誰だか分らない。

第四節 自六一頁六行 少彦名のみことといふ神様。

かゝし 少彦名のみこと おつれになりました。

第五節 自六三頁三行 いろいろと世の中を開けせられた。

野や山 田や島 道 橋 病氣。

第六節 自六三頁八行 みことのお姿が見えなくなつた。

至を は おいとまいたします どうして 新しい國を開きに 粟の莖 さようなら。

一、新出文字及語句

海岸、俣者、蟲、皮、病氣、新しい、粟、莖、姿。

ひよつこり、ひきがへる、ばちくり、存じません、家畜、するく、したつた。

一、目的

讀を通して神話にいたしました。少彦名命が大國主命と協力して國土經營の任に當り知と愛に満ちたる生々發展の御精神に感ぜしめ、敬神の念を養ふ。

一、時間配當及區分

第一時 全文の讀み方、讀みを中心として事實の概観

第二時 始めから六十頁五行までの精査、形式指導讀みの練習

第三時 六十三頁七行までの精査、朗讀練習

第四時 終りまでの精査、新字語句練習、朗讀練習

第五時 全文鑑賞總括

一、教授過程(本時、第一時扱)

1 目的指示

○今日はどこをおけいこするのですか

兒童發表

第五篇 實 際 篇

板書事項

少彦名のみこと

二二三

○読んで來ましたかね一つ読んで戴きませう

2 指名讀……六名 通讀一名

○分節讀……六名 通讀一名

3 話し合ひ

○何か分つた事がありますか——

児童發表

發表に依りては、挿畫提出(主要事項の板書)

4 範讀或は指名讀(優等兒)

5 話し合ひ……内容大觀

○書きながらしらべませう

○大國主のみことは何處をおあるきになつてゐましたか

児童發表

○海岸で何が見えましたか——

○はじめはなぜ分らなかつたか

児童發表 何に見えたか

小さい神とはどうして分りましたか

大國主のみこと
少彦名みことと心を合せての
おはなしに

出雲の海岸
小さい物——虫
小さい神様
供の者
かへる

はじめ、口をきかれない、どうしたかね
それから、そして、だれが

○何んと答へましたか

児童發表

○大國主命はよろこばれましたね

そしてどうなさいました……家へ

○二人はどうされましたか

児童發表

國土經營

○少彦名のみことはそれからどうなさいました

児童發表

8 板書事項整理

想の流れにより少彦名のみことの國土經營を明らかにする

7 指名讀

よんで了りにしませう

挿繪觀察(參考)

第五篇 賈 際 篇

かゝし
ちゑのある神様

心を合せて

新しい國

第一圖 豆の鞘の舟に乗つて、棹を操られる少彦名命虫の皮の着物を着てゐられる小さい御身にも自然の威嚴が備はつてゐる。

第二圖 ひきがへるが恭々しい態度をして案山子の物識なることを申し上げてゐる所、立つておられるのが大國主命、さすがに威風あたりを拂ふものがある、家來の指さす田の中に立つ案山子の姿も面白い、はるか八重の瀬路に渺茫たる感が漂ふてゐる。

第三圖 粟の莖の弾力て空中遙かにとんで行かれる少彦名命全く風船王の様に軽々と自由な御身である。

繪は……和田三造氏

五、日本史話

一、教材 卷七第六鎌倉攻

一、教材觀

本課は太平記を原據としてゐる有名な物語である。國史を學ばない兒童にはつきりした時代觀とか義貞の誠忠とかを徹底させる事は無理である。然し此の課のもつ生命は、單に史實を傳へる事ではない。義貞が太刀を海に投じて神に至誠を捧げる場合を中心とした忠義の心と勇ましい鎌倉攻めの様子を知らしめ、英雄的物語武勇物語を好むこの期の心理生活を充足せしめればよいのであると思ふ。

1 内容的考察

1 此の文は太平記によつて新田義貞の鎌倉攻めの一節を兒童風に書き改めた教材である。所謂ボット出主義といふ斷敘法的筆致でいきなり「極樂寺坂の味方があやふうございます。」と如何にも急迫した場面の敘述からはじまつてゐる。しかしこの處にこゝまでに来る経路が當然語られてゐなければ、兒童にその意味を了介させることは出来ない。即ち元弘三年五月新田義貞が兵を上野に起してから同志を叫號して、いよいよ五月十八日には鎌倉攻にうつるのである。鎌倉は名に負ふ天下の要塞、三方山をめぐらし一方は海、攻めるにたく守るに易い所である。北條方は海に船をあまた浮べ怠りない。そこで義貞は兵を三手に分けて三方から攻め寄せる戦法をとつた。一隊は十萬餘騎北より小袋坂を襲ひ、一隊は四十萬七千騎總大将義貞が率ゐて西から化粧坂に向つた、他の一隊は十萬騎は海岸より進んで極樂寺坂に向つたのである。この中極樂寺坂に向つた大館二郎宗氏の率ゐる一隊は敵に切りまくられ、腰越まで引上げて來つゞいて大将大館宗氏は討死してしまつたのである。讀本文で「極樂寺坂の味方があやふうございます。」と大將も討死されました。」といつてゐるのはこのことをのべてゐるのである。

ロ 文は上にも述べた様に太平記を兒童風に書き改めたものであるが、原文の風格をつたへてゐて次の様な特色をもつてゐる。

- 1 斷敘法的に書出して急迫した場面を持つてゐること。
- 2 全體が非常にきび／＼しい筆致で書かれてゐることは戦の様を書く上に恰好であること。
- 3 軍物語風に書かれてゐる。
- 4 敵・味方の心持がはつきりして明かであること。

5 太平記に従つたために兵數其の他が極めて大きくあらはれてゐること。等が全文を色づけてゐる。このことは戦記物語の特色でもあるからよく説明して相當まで兒童に了介せしめておくことが必要である。

ハ 文章の發展は次の様である。

1 新田義貞が極樂寺坂に向ふ。

2 鎌倉のそなへ——海陸ともに攻めこむすぎがありません。」

3 黄金作の太刀を海神に獻す——潮を退けて道を開かせ給へ。」

4 二十餘町干上る。

5 一時に鎌倉に攻めこむ——防ぐにも防がれず。」

6 北條方は亡ぶ——北條方は此の火の中にほろびてしまひました。」

○第二節 鎌倉のそなへ 稻村ヶ崎についてそこから敵のそなへを望見して、如何にも堅固な様子を見てとつたのである。此の山手には、木戸を立て、數萬の兵が守り、南の海上には……ひし／＼と軍船が浮び大木がきりたふしてあるといった様に非常に堅固な様である。

○第三節 黄金作の太刀を獻す この一節が全文の中心をなすところと見らる、前節の様な堅固な敵兵の守りを見た義貞は、この上は潮干を利用してその干潟から攻込むより外途なしと考へたのであつた。そして……馬から下りてかぶとをぬぎ、「はる／＼海上を拜しました。……この舉止は義貞の念願のあらはれてあるから注意す

べき表現である。

「義貞今天皇の御爲にいくさを起して、賊臣北條を亡ぼさうとしてゐます……道を開かせ給へ……これこそ義貞の心願を卒直に表現したものであり、その中の一句——天皇の御爲」は、悲壯な決心のうちにも、神明の加護を切願するところの心持が表れてゐるのである。即ち日本精神の表徴である。

○第四節 潮は二十町餘も干上つた。この事はまことに義貞の至誠が神に通じたのである。そして「……落ちて行く潮にさそはれて……流されました。」干潟の道が開けたばかりでなく、賊の軍船が、潮とともに海上遙か落ちていつた事は何といふ幸であらうか、これこそ眞に義貞の日本精神が誠心が通じ、まことに神の加護であり天の祐であるといはねばならない。

○第五節 鎌倉への攻込み

「……ものども進め……。」と其の速干がたを眞一文字に鎌倉さして攻めにんだ。そこには既に必勝の意義が見られるのである。「賊のそなへは忽ちくすれて、防ぐにも防がれず」たゞあわてさはいてには義貞の攻込みの奏効を物語るものであつて次に來る敘述の伏線ともなつてゐる。

○第六節 城に火をかけて北條方を亡ぼす。

無類の備をほこつた北條方も神の加護と義貞の至誠とその手腕とによつて遂に自ら亡ぶことゝなつてしまつたのである。

敵將、北條高時は東勝寺に入つて自殺し、これに殉じた北條方の武士は八百七十餘人と數へられた。高時は年

三十一才であつた。

かくて五月十八日より日を経ること四日、五月二十二日に戦は終りをつげたのである。

◎特に本校生徒は鎌倉の地に生る者多き爲、機會あるごとにこれ等の史蹟にて臨地指導をなし、又研究物を蒐集せしめ以て日本精神涵養の一端にせしめたい。

形式方面として、總大将、鎌倉、賊臣、開かせ、満ちて、眞一文字、忽ち防ぐ、討死、此方、數萬、浮べ起す、等が新しく出てゐる。

一、目的 新田義貞が北條高時を討滅する次第を描きし文を讀ませ義貞の誠忠に感ぜしむ。

一、區分

第一時 全文通讀、主題の把握、關係史實の説話

第二時 第一、二節の研究

第三時 第三、四節の研究

第四時 第四節及全文總括

一、教授過程

板書事項

1 目的

勇ましい鎌倉攻と義貞の忠誠を感得せしめ同時に文字語句の理解をはかる。

2 教順

鎌倉攻

○鎌倉攻です、誰が攻めたのでせうか。

○誰を何ぞ攻めたのでせうか。(こゝで概略を話す)

○さあそれでは讀んでみませう。(自由讀)

○新出文字(板書せる小黑板)筆順も記入

○指名讀

さあどんなことが書いてあるのでせうか(優、中生三名)讀んで頂きませう

○よく讀めました、先生が一度よんでみます

○默讀 それでは何が書いてありますか、又どんなところに心を引かれるか

よんでごらん。

○文意の直観

○何かわかつたことはありませんか

△讀んでどんな心になりますか——(板書)

△戦ひはどんな具合に進みましたか

△何時でせう

△義貞のえらいところはどこでせう

○それでは、どこが偉いか精はしく調べませう

新田義貞
北條高時

大将も討死

總大将の新田義貞

その前に六ヶ敷しい語句をならひませう。(板書)

3 整理

○どんなことが書いてありましたか

○この次はその偉いところを調べませう。

三萬騎を引きつれて

此方について

數萬の兵

軍船を浮べて

天皇の御ためにいくさを起して

賊臣北條をほろぼさう

眞一文字に

鎌倉さして攻めこみました

第二次

1 目的

○構想の研究、語句文字の理解第一、二節の深究により不利と急迫の戦況にありながら剛腹沈着な義貞の態度と賊の備へとを知らしむ。

2 教順

○自由讀

○前時の復習

鎌倉には賊臣誰かゐりましたか

誰が攻めたのでせう

鎌倉攻

○指名讀(二、三名)

よくよめましたね。一、二節

○各節意の發表、わからない言葉はありませんか。

○それでは一、二節を読んで頂きませう。

○「大將も討死されました」とは誰なのでせう。

○このことから極樂寺の戦がどんなであつたかわかりますか。

○その時の新田義貞はどこにゐましたか、どうしましたか。——義貞のどんなところがわかりますか。

○義貞は、そこでどうしましたか、その経路の説明。

○賊のそなへはどうでせうか。

○義貞は攻込むことが出来るでせうか。

○そこでどんな心でしたらう、どうすればこの賊の備を打ち破ることが出来るでせうか。

3 範讀

4 整理、板書事項の整理

第三時

大將も討死されました

總大將の新田義貞はびくともしませんでした

せん

たゞちに↓極樂寺坂

北の山手——木戸を立て、

南の海上——ひし／＼と 軍船を浮べて

岸には——大木をきりたふして

1 目的

○義貞の至誠と潮が干上り、賊を潰滅せしめた物語を十分味はしめる

2 教順

○自由讀三分

賊の備はどうであつたらう。

そこで義貞はどうしたのでせうか。

○指名讀 三名

3 範讀

○義貞はどうしました。

何を祈りましたか、どうしたのですか

挿繪の取扱ひ

○潮はどうなりましたか。

○義貞は之を見てとありますが何をみて何と命令したのですか。——心持は、

○賊はどうなつたか。

○そこで義貞はどうしたか。

黙讀 板書整理

はるる

天皇の御ため

賊臣北條

道を開かせ給へと念じ

黄金作の太刀

にはかに干上つて

落ちて行く潮にさそはれて

「ものども進め」

遠干がた

眞一文字

防ぐにも防がれず

びくともしません

海陸ともに

海神

第四時

1 目的

○賊の潰滅の様子及び全文の總括

○自由讀

○極樂寺の様子はどうでありましたか。

○新田義貞はどうでありましたか。

○敵のそなへはどうでありましたか。

○義貞はどうしましたか。

○道を開くために何と祈りましたか。

○潮はどうなりましたか。

○義貞はどうしましたか。

○北條方はどうしましたか。

○指名讀 二名

2 範讀

○義貞はどうしましたか。

○北條方はどうしましたか。

○新田義貞のえらいところはどこでせう。

○文章の書きあらはし方について

○眼に見えるやうな書きぶりについて

○朗讀

○感想、發表

○その後の義貞の活動について補説。

○書取練習

指導

あふり立て

一面火の海になつて

賊の大將高時以下

北條方

ほろぶ

六、日本説話

一、教材 卷十第九陶工柿右衛門

一、教材觀

1 全文は陶工柿右衛門が柿の色の美しさを発見してからその焼付に熱中し彼の生命とする技術上の満足を得るために苦心碎身遂に成功其の意を得、古今の名工として其の名を國の内外にとどろかしてゐるといふことを書いたものである、そして名人氣質を味ふことが出来るやうな書き振りである。分節して見ると

○第一節 初めから四十五頁九行まで

目の醒めるやうな柿の色の美しさに打たれて、日頃からのあこがれの心をふるひ起して焼物の中にその色を出さうと思ふやうになつた。

○第二節 四十五頁十行から四十六頁四行まで

毎日赤色の焼付に熱中したが目ざす柿の色の美しさは出てこない、その仕事の上の困難を表はしてゐる。

○第三節 四十六頁五行から四十七頁四行まで

赤色の焼付に熱中したため其の日の暮しにも困るやうになり、弟子達にも次第に逃げ去られ又他人から氣狂扱ひにされるやうな困難におちいつたこと、然し彼は夕日を浴びた柿の色にあこがれてゐて少しもとんちやくしないことを明かにしてゐる。

○第四節 四十七頁五行から四十八頁七行まで

いよく成功に近づいた自信を得たが、然したくべき薪はない苦しい頂上である。

○第五節 四十八頁八行から四十九頁六行まで

いよく柿の色の赤色を皿に焼付けた刹那の喜びと名を柿右衛門と改めたこと。

○第六節 四十九頁七行から終りまで

柿右衛門の名聲が高まつた。

2 今を去る三百年前肥前の有田にあつて父の志をつぎ白手焼の名手となり、さらに當時支那より渡來の濃麗な色

彩、絢爛を極めに錦手焼をわが手によつて作り出さうと其の途にあつた。喜三右衛門は「窯場から出て……つかれた體を休めた」によつていかに其の製作に努力してゐたか、想像される。

何げなく見上げると夕日に照り輝いてゐる柿の實、「餘りの美しさにうつとりと見とれてゐた」ぼうとしてゐた心からだん／＼と自己のあこがれの心を目醒ましていつた。彼は我が國民性に合致したものは濃厚な美よりあつさりした中に現はれる美しさ、即ち自然の美であるとして見てゐたので夕日を浴びた柿の色に強く打たれたのである。「あゝきれいだ。あの色をどうかして出したいものだ」は彼の心の叫びであつた。そして直ちに焼物の中にあの色をとり入れやうと意を決して、其の日から、赤色の焼付に熱中した。「自分の生命を製作に投げこむあたり名人氣質が窺はれる。彼の頭の中にある目のさめるやうな柿の色と窯の中から出てくるものが一致しない「焼いてはくだけ、焼いてはくだけ」そして歎息する彼の姿「見る眼もたましい」程の語によつて氣の毒さが強く心にひびく、他の困難はその上にふりかゝる、「其の日の暮しにも困るやうになり」「手助けする人さへも無くなる」然し「研究を止めようとしなさい」彼であるから人が「たわけとあざけり氣ちがひと罵つた」位の世評によつて彼の初一念をひるがへすはづがない。かうした内憂外患にとんちやくせず、唯一筋に夕日を浴びた柿の焼付に五、六年を過した。

焼付に對する苦心は實に火の強弱と釉藥の濃淡の加減にあつた。或は遠く錦手焼に關する參考をあさり歩いたが遂に其の意は得られない。或日の夕方、これといふな、これと出るなど豫感と自信から「薪は無いか、薪は無いのか」の叫びが發せられた。今はたくべき薪すらない彼の清貧さ苦しさ。然し柿の色が出さうだと信じた彼の心は

すつかり緊張した。その動作は氣がくるつたやう。火を見つめる目は血去つてゐる、やがて「よし」と叫んだこの一語、いかに自信にあふれてゐたか、強い一語である。其の夜のもどかしさ、翌朝ふるへる足をふみしめて、窯をあけにかゝる、そして一つ又一つと血を出してゐた彼の眼、彼の顔、想像せずには居られない大きな苦しみは大きな喜びを生む。こをとりする其の時に姿が見えるやうだ。彼はます／＼「研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで精巧な陶器を製作するに至つた」と名工の名工たる所以はこゝにも在ると思ふ。斯くして彼の名は國の内外に高まつた。

不屈不撓工夫創作に精進する彼の生活態度を通じて國民的精神涵養に價値ある教材と觀る。

一、目的

日頃から自然の色にあこがれてゐた、陶工柿右衛門が夕日を浴びた目のさめるやうな柿の色の美しさに打たれてその色を自分の職業としてゐる焼物の色に焼きつけるために、あらゆる困難を排して遂に成功し、さらに今日の有田焼を工夫して其の名を國の内外にとどろかした苦心のあとを讀み味ふことによつて名人の人柄及び藝術的心境を窺はせたい。

一、教材區分及び時間目的

第一時 全課の通讀、新出文字の取扱ひ、この話の筋をとらへさせる(文の表面的解釋)。

第二時 第一、二、三節の深究を行ひ、喜三右衛門が柿の色の美しさに見とれたことが動機となつて、これを燒

付けやうと思ひ立ち、苦心に苦心を重ねつゝ熱中する様子を具體的に表現を通して味はせて行く。

第三時 第四、第五節の深究を行ひ苦心の頂點から成功するまでの様子を味はせる。

第四時 第六節の深究を行ひ且つ全課の總括的取扱を行ふ。

一、準備掛圖

板書事項

一、教授過程

緣先、自然困難、罵る唯難る、一

第一時

番難、皿、尙、精巧

1 全文の通讀

○指名讀 一、二節づゝ二回ほど (正しく讀むこと、文字の取扱ひ)

○教師讀む (きいてゐてどんなことを心に思ひましたか——發表)

○自由讀 (正しく讀む、わからない言葉を調べておく)

○指名讀 全文を一、二回 (話の筋を考へさせておく)

2 話し合ひ

○質問 (主としてわからない言葉)

○喜三右衛門とは誰のことか、又何を仕事としてゐましたか

○何がもと(動機)で柿の色の焼付を思ひたつたのですか

○焼付に對してどんな様子でした

○この焼付にどんな苦勞をしましたか

陶工柿右衛門
夕日を浴びた
柿の色の美しさ
熱中した

○苦勞の中での喜三右衛門は

○この焼付は成功しましたか、そのときの喜びは

○其の後の彼は

3 整理

○板書事項の讀み

○全文通讀

○大體どんなことが書かれてあるか

第二時

1 全課の通讀及び概意の復演

2 本時文の通讀

一、指名讀 一節づゝ一、二回 (各節意を考へる——發表)

二、自由讀 (正しく讀むこと、各節意をはつきりさせる)

目ざす柿の色の美しさは出ない

暮しに困る

手助けする人さへなくなる

人はあざけり、罵る

夕日を浴びた柿の色

こをどり、成功

古今の名工

3 第一節の深究及語句の吟味

○驚場から来た喜三右衛門はどうしましたか

○彼の心を引いたものは何ですか

○そのときどんな心持になりましたか

○なぜそんなに柿の色の美しさに打たれたのですか

○普通の人とちがつてゐるところはどんな所ですか

4 第二節の深究及び語句の吟味

○立つて居ても居られなくなつた彼はどうしたか

○うまく出来ましたか

5 第三節の深究及び語句の吟味

○困難はそればかりでなかつたとあるがそれは何をさしますか、そのほか

○どんな困難があつたのですか

○然し彼は

第三時

1 全文の通讀

○分節讀 一節づゝ

陶工柿右衛門

つかれた體を休めた

夕日を浴びた柿の色の美しさ——

うつとり

「あゝきれいだ。あの色をどうかし

て出したいものだ」

あこがれ——自然の色

立つても居ても居られない

其の日から——熱中

目ざす柿の色の美しさは出ない

歎息

其の日の暮しに困る

手助けする人はなくなり

人はあざけり罵る

唯夕日を浴びた柿の色

○全文讀、一、二名

2 本時分の通讀

○分節讀 (節意を考へる——發表)

○自由讀 (節意をはつきりさせる)

3 第四節の深究及語句の吟味

○「かうして五、六年はたつた」とあるが何をしてゐたのですか

○或日の夕方彼はどんな様子でしたか

○どうしてそんなあわたゞしきになつたのですか

○其の彼は

○夜が明けたときの彼は

○皿をさぐばた彼は

4 整理

○板書事項のよみ

5 本時分の讀み

○板書事項のよみ

○本時分の讀み

陶工柿右衛門

夕方あわたゞしさ

「薪は無いか、薪は無いか」

氣がくるつた様

血走つた目

「よし」

其の夜——もどかしさ

夜明——ふるふる足

「つ又一つ

「これだ」「出来た」

こをどり——成功

第四時

○全文を教師讀む

1 全文の通讀

○分節讀、中等兒童以下

○全文讀み

2 本時分の讀み——第六節の取扱ひ

○柿右衛門はいつ頃の人でどこに居た人か

○彼は何を製作したか

○彼はどんな人と云はれるか

3 全課の總括

○彼はなぜ古今の名工とたゞへられるのか考へて見ませう

○彼のえらいところはどこでせう——發表

○朗讀について話し合ひ

○朗讀練習

陶工柿右衛門
三百年ばかり前
肥前の有田にゐた陶工
精巧な陶器(柿右衛門風)
古今の名工

たゞへらる——國の内外

柿の色の美しさ 焼付に熱中

色が出ない

【困】 暮しにこまる

手助けする人

【難】 さへない

きがくるつた

唯 日夕浴をたび柿の色

成功

研究に研究を重ね工夫に工夫を積んだ

精巧な陶器製作

七、國家生活文

一、教材 卷十一第六課裁判

一、教材觀

裁判に關する概要を述べて一般的常識を養はんとする教材であるが、其の趣旨が公民思想の養成、日本國民として正義道徳を愛し行ふ所にあるのはいふまでもなからう。

人が集團生活を営むにあたり自然的に人々相互の安寧秩序を維持するために規約が生ずる。自然の規約は習慣となり、道徳となり、條文として理智的な規約は法律となる。そして此等の規約を守るために裁判なるものゝ必要を生ずるのである。裁判が如何に國民の利益幸福を保護し世の罪惡非道を處罰し懲戒してゐるかを知らしめるのが本課の中心層であらう。

文の構成から觀めて行く時、裁判の種類、裁判の組織、裁判の構成そして裁判の目的と記述してあるが、どれも公民的立場から知的立場からながめて行く時には大切にして缺くべからざるものではあるが、これを日本國民として考へる時にかみ天皇の命によつて行ふ裁判を具體的に知らしめるは勿論裁判の目的が正義保護のためにある

ことを感得せしめなければならぬ。又そうした目的に向つて教授を進めて行くべきではなからうか、天皇の赤子として、一家の如き平和を營む人々を幸福なる道に進ませるために正邪曲直の道を正し善良なる國民を養成すること教育の目的である。たゞ單なる知識、裁判の知識を興へてもつて足れりとするは大ひなるあやまりと知らねばならぬ。正義人道を愛し且つ行ふ人々て此の世が充滿されたならば自然裁判の必要もなくなつて來るのである。正義人道をふみ行ふ人は善良な國民であり忠良な國民であるのである。此の課の如きも最後に汲みとるべき生命の泉は二十頁十行の「裁判は實に正義保護のために大切な仕事であり」といふ所にあると思ふのである。正義愛護の教材は多々あるが今其等の中から一々ひろひ上げて見ると「桃太郎」「サルトカニ」「コブトリ」「花サカチ、イ」「熊のさゝやき」「中村君」「大岡さばき」「鉢の木」「孔子等」がある。大岡さばきは裁判の型式上から具體的例として取扱ふにもよい、即ち(一)子供あらそひは民事裁判(二)石地蔵は刑事裁判と見られるから、

一、目的

本文を讀むことにより裁判に関する特殊なる要語を理解させ公民的知識を得させ正義愛護の念を涵養したい。

二、時間的

- 第一時 本文のよみと裁判に関する概要を研究せしむ。
- 第二時 文の内容(種類、組織、構成、目的)の究明特殊なる要語の解釋をなす。
- 第三時 一層明確に且つ具體的に其の内容を深究し、裁判の目的がどこにあるかを知らして正義を愛する念を養ひたい。

一、教授過程

- 裁判とはどんな事ですか
- 全文の通讀
- 各一節づゝ……わかつた事がありますか
- 範 讀
- どんな事が書いてありましたか
- 新出文字・讀替文字による文の大觀
- 新出文字讀替文字の聽寫
- 板書の齊讀
- 板書語句についての解釋
- ……教科書のよみ……
- 板書文字を中心にしての話し合
- 人々相互の間の訴訟を何と言ひますか、
- 犯罪者を罰するための裁判を何と言ひますか
- 組織はいく階段になつてゐます
- 裁判はどんな人たちによつて行はれますか

板書事項

- 裁判
- 聞いた上で——費主
- 主張を正當とみとめれば
- 借金を返すやう……借主
- 人々相互の間の訴訟
- 民事裁判
- 犯罪の疑 刑罰
- 刑事裁判
- 檢事——處罰を永める
- 事件の輕重
- 組織
- 判事……陪審員
- 辯護士……附添人
- 正義保護
- 陪審員の任務は極めて重大

裁判の目的は

○よみの研究(發音アクセント)等

裁判

一、教授過程

○全文のよみ……一、二回

何か質問がありますか

○内容の研究

1 裁判の種類にはどんなのがありますか

民事刑事裁判の意義及び相異

2 どんな組織になつて居ますか

二十頁八行から二十一頁六行までのよみ

軽い事件の階段と重い事件の階段

3 どんな人たちによつて作られるか(構成)

判事は何をする人か、検事はどんな人ですか

辯護士は民事、刑事にどうしますか

4 裁判の目的はどうですか、何と書いてありますか

種類

民事裁判 | 原告…訴へた人
人々相互の争 | 被告…訴へられた人
刑事裁判 | 原告…検事
犯罪者の處罰 | 被告…犯罪者

組織

軽い事件 ↓ 區裁判所 ↓ 地方裁判所 ↓ 大審院
重い事件 ↓ 地方裁判所 ↓ 控訴院 ↓ 大審院

構成

判事—裁判を行ふ
検事—處罰を求める
(刑事裁判)

辯護士

民事裁判…相談相手
添人代理人
刑事裁判…被告を保護する

陪審員…事實の判断

○難解なる敘述を吟味して其の眞意を了解させる

例、兩者の言分、適當公平な裁判

平和な秩序正しい世の中……等

○全文のよみ……朗讀練習

教授過程

○全文のよみ…五、六名

民事裁判はどんな時に行はれますか

例…大岡さばき (一)其他

刑事裁判はどんな時に行はれるのでせう

何故刑罰をかせるのですか、國家は適當公平な裁判をするためにどうしますか

○裁判の組織はどうなつてゐますか

なぜ三回も裁判をするのでせうね

○二十一頁七行目から終りまでのよみ

辯護士は何のためにあるのでせう

陪審員は何をするのでせう、どんな人がなりますか

目的

…平和な秩序正しい世の中にする 正義保護

民事裁判

主張を正當とみとめ 貸主 借主

刑事裁判

犯罪 適當公平な裁判

裁判を念入にする

辯護士

被告を保護する 主張を助け
不適當な刑罰

平和な秩序正しい世の中にする

事實の話によつて職員其の他の人との話をする

○此の世に裁判がなかつたならばどうなるてせうね

又裁判が公平に行はれなかつたらどうなります

朗讀練習(發音、休止、抑揚について)

語句の應用練習(例)

不適な刑罰、不服なもの……意義取扱

罰、檢、訴……熟語

八、自然觀照文

一、教材 小學國語讀本卷一六頁アサヒ

一、教材觀

○「オヒサマアカイアサヒガアカイ」

未だ朝靄が霽れやらす模糊とした森の彼方に大きく生れ出た太陽。空も靄の中の家根も野も、そしてそれを見入る子供らや、その飼犬をも新しい光にあかく染めて、萬物のまだ醒めやらぬ深い静もりの中にひとり生々と上つて行く、たま／＼きやうだい三人が朝早く起きてこの莊嚴な光景を見出たのである。

兄と妹は其の美しさ輝かしさに見とれ、弟は思はず双手を舉げて叫んだ。ボチも一瞬、何物にか打たれたものゝやうである。此の子供達の、又、同じく日の出を仰ぐ日本中の子供の心の叫びが「オヒサマアカイアサヒガアカ

イ」である。

○はじめ朝日の輝かしい姿に驚異の目を見はつた切迫した氣持が「オヒサマアカイ」と口づさみ、その瞬間このお日様は朝日だと氣がついて

○重ねて「アサヒガアカイ」と口づさんだ。此の反復に依るリズムミカルな表現が童謡となつたのである。中心語句は「アカイ」である。

○「オヒサマ」(お日様)はヒ(日、太陽)を丁寧に言つたもので、東京地方の生活語である。「アカイ」には色の赤といふ意味もあひが、こゝでは寧ろ光が明るくて輝かしいといふ意味が強い。

○新字は「オ」「ヒ」「マ」「ア」「カ」の五字。「カ」は既に「ガ」として提出され(三頁)たので、こゝで正しい讀を授けることゝなつて居るが、「ガ」も亦出て居るので比較に便である。

發音上「ヒ」は「シ」と混同せぬやう、字形上「マ」及び「ア」は共に比較的困難な點を注意すべきであらう。

一、目的

讀を通じて朝日の輝かしい姿に感じさせると共に反復によるリズムミカルな表現の妙味に興味をおこさせ「オ」「ヒ」「マ」「ア」「カ」の正しい讀方と書方を授ける。

一、時間配當

第一時—主として讀方の指導

第二時—主として書方の指導

任務……極めて重大

不法な行、相互……等の短文取扱

一、教授過程

第一時

一、板書の文を読ませる

○お日様の歌を読みませう

教材の板書、自由讀、兒童と共に齊讀(時に範追讀を行ふ)

二三名に個讀もさせる(「オ」「ヒ」「マ」「ア」「カ」の正しい讀方、發音の矯正「カ」と「ガ」の比較を行ふ。)

二、日の出の繪畫に合せて讀ませる——内容の想像

(掛圖の提出、話合)

○日の出の繪ですね。お日様が木の間から出てゐます。

○大きなお日様ですね。きら／＼光つてゐますね。

○未だお日様が出たばかりだから薄暗いんですね。これは？(木)、これは？(お家)

○子供が三人日の出を見てゐます。きやうだいですね。犬も見てゐますね

○三人のきやうだいが朝早く起きてこの日の出の景色を「あ、きれいだなあ」と思はず見とれてゐる所ですね。

(讀本の挿畫の觀察)

板書の文を齊讀させる。個讀もさせる。

三、讀本の文を読ませる。

はじめ拾讀の齊讀、(指で一字づつさして)漸次語にまとめる。

第二時

一、教材の板書、讀みの復習

教材は丁寧に板書し其の間よく見させる。

讀みを復習する——個讀及齊讀

二、「オ」「ヒ」「マ」「ア」「カ」の正しい書方指導

順々に筆順と字形を授けて書方を練習させる

「マ」はマの如くマの角が大きく、又ママの如く點の位置が片より易いから注意する。

「ア」はア、アの如くなり易い點を注意する。なほ

「マ」「ア」二字は字形が類似してゐるから比較してはつきり其の區別を悟らせる。

(この間に之等新出の五十音圖上に於ける位置を知らせる)

三、全文の聽寫

四、板書の文、讀本の文、書取の文をかはるく齊讀させる

五、朗 讀

○今、朝日を見るやうな心持で、リズムミカルな表現に興味を持たせ乍ら朗讀させる(速度約四秒)

六、新字の練習

1 ヒガサ、タマ、アタマ、カラカサ、
サカ、タカイ、オカアサマ 等の書取

2 カード並べ(語をつくる)カード拾ひ

一、準 備

豫め日の出を觀察させて置く(少し早い頃に早起を獎勵し乍ら行ふ)

六頁の挿畫を擴大した掛圖

「オ」「ヒ」「マ」「ア」「カ」のカード

一、科の連絡

圖畫 日の出の景色、本課取扱中(或は直後)に畫かせる。

唱歌 次の課、(ヒノマルノハタ)とかけて、唱歌、日の丸の旗を授ける。

體操 日の丸の旗の遊戲を同時に教へる。

九、韻 文

一、教 材 尋常小學國語讀本卷十二第七課録倉

一、教材觀 武家政治華かなりし頃天下の政權を掌握して日本歴史の一頁を飾つたこの録倉を、今遠き昔の姿を現實の世界によびさまして追憶の情趣を語る韻文、それをこの録倉に育つ子供等の魂にくひ入らしめようとして教壇に立つ私は如何に教材に觀めて行くか。

先づ讀後の直觀について述べよう、質實剛健誠忠無二な武士道發生の地録倉に今幾多の過去を語る物が残されてゐる。そして其等が我々の環境として精神生活に深くくひ入つてゐることは云ふまでもない事である。

稲村崎、長谷の觀音、大佛、そして八幡宮、大塔宮、建長圓覺の兩寺等最も其の時代を代表的に現はすものと言ふべきものである。其處に物語られる涙のあと、勇壯果敢な武士生活の中に綴られた悲話哀愁、それがいやが上にも昔の録倉を追憶する眼には涙をそゝるのである。榮枯盛衰は世のならひとはいひながら、今はたゞ湘南の名勝としての録倉、さびしくも生ひ育つてこゝに七百年、興亡極りなく幾變遷の歴史を續けて現實の生活を營む我々がこの文字をよむ事により客觀視した録倉が追憶の夢にのせられて來る。それがやがては兒童の自覺せる精神に及んで郷土を見なほす眼と郷土愛の精神が助長伸展されて來るものと思はれる。

然らば本文が如何に過去の歴史を物語つてゐるか、本文と史實との關係を見たい、文の内容に深き史實が存すればこそ、この文を讀んで懐古的の念が強められて行くのである。「稲村崎、名將の劍投せし古戰場、」は建武中興

の忠臣新田義貞が元弘三年五月二十三日この所に於て海神に祈つて天贖鎌倉にせめ入つた地であり、長谷観音は鎌倉第一の古き寺として知られ露坐の大佛は鎌倉時代の文化を物語るものである。「由比の濱邊雪の下道」其處にも幾多の物語が秘められてゐる。「八幡宮の御やしる」は鎌倉の發展の中心であり、此の社を中心として物語られる幾多の史料がある事は申すまでもなからう。源氏の氏神としてこゝに鎮座しましてから八百餘年、石段の左にそゝりたつ大銀杏は源家三代の滅亡に關する悲史を有し、若宮堂には靜御前の貞節と悲話との物語が残されてゐる。

(尙祭神としては本宮が應仁仲哀の天皇及び神功皇后をおまつりし、若宮には仁徳履仲の二天皇に仲媛命、磐媛命を祭る)。

「鎌倉宮にまうてては」建武二年七月二十三日御年二十八才をもつて逆臣足利尊氏の陰謀に斃られた悲史に悲憤の涙をそゞぐ。かくして政權は京都にもどり、鎌倉幕府創設の頼朝の墓も風雨にさらされてこゝにきたつたのである。諸行無常の鐘の音も五山に及んで今は北條時頼建立の建長寺、時宗建立の圓覺寺が昔の面影をとゞめてゐる。

情趣深き鎌倉の史的研究を終へて本文の解釋方面に筆を運ばふ。

韻文教材の文が如何に多くの内容を凝集して表はされてゐるかは今更とくまでもなからう。

今私は史的内容をもものは左記に述べた故純粹な解釋方面からそれを觀めて見たいと思ふ。

「稻村崎、名將の劍投ぜし古戰場。」の句は調子の上から讀めば「名將の」で切らなければならぬが名將が劍を投げ入れた古戰場である故に稻村崎で切つて、名將の劍……は續けて讀む様にした。そこに容易に其の意味がわかるのではないかと思ふ。これと同じく「長谷観音の堂近く露坐の大佛おはします。」の所で「近く」の意は極樂寺坂の近くに長谷観音の堂があるといふ意味でなく、観音の近くに大佛があるといふ意味である故に「近く」で切らずに次につゞけて讀むことである。「問はばや遠き世々の跡。」ばやは希望の助詞であつて動詞の否定形について我が動作に關する希望をあらはすものである。故に「遠い昔の出來事を聞いて見たいものだ」と言ふ意になるのである。

「しづのをだまきくりかへし」は靜御前が舞ひを舞つた時の歌をもつて來たもので「しづやしづしづのをだまきくりかへし、昔を今になすよしもがな」の歌から出たものであらう。この歌は又伊勢物語の「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔をいまになすよしもがな」の歌を變へたものである。又千載集には「戀をのみしづのをだまき苦しきはあはて年ふる思ひなりけり。」等の歌もある。「しづ」はかぜ穀・麻等にて縞を織り出したものであやぬのしづおおり、あらたへ等といふ、をだまきは續麻を内の空しき圓形に巻きつけたものであるがこゝでは「くりかへし」の枕言葉としての歌にもつかわれてゐるのである。「くりかへし」は懸詞で「くりかへし」思ひしのぶといふ意と「をだまきをくりかへす」といふ意味を含んでゐるものと思はれる。「かへしし人」はくりかへした人即ち靜御前である。

「悲憤の涙わきぬべし。」のべしはむづかし意味である。それは推量可能、適當、義務、命令、未來等の意を表はす助動詞であるが、その前に來る、「ぬ」が過去完了を表はす助動詞である故にこゝでは必然の意にとつて「わき

出します」而も「ますはつよめて表はす言葉として取りたい。或書の様「わき出るであらう」等の推量の意にはとりたくない。推量的であれば其の感じが表はれない。

「興亡すべてゆめに似て」のこの一句は文全體から受ける感じてあり實際に跡を尋ねた實感である。故にこの語は全體をまとめるものとして内容理會と鑑賞する時の中心語句として取扱ふ。これと同じく、この文の中心想をつかんで居るのは「昔の音やこもらん」の一句でよく追憶の情趣を自然の姿にみつめてゐるものである。たゞこゝにある「らん」の一言は推量の助動詞「らむ」の事であらうと思はれが其の表現が「ん」となつてゐる。これは鎌倉時代からの表現が捉音が多くなつて剛健な表はし方をした所に注意したい。

次に文の表現形式をたどつて鑑賞したい。

七五調三聯一句の形式をとつた一寸古めかしい韻文ではあるが讀んで行くと又格別なひびきがあつて氣持のよい文である。七、五調其のものが持つリズムからばかりでなく、内容律から受ける感じが大ひに感情を支配して居ることと思ふ。勇壯な古戰場をうつすかと思へば靜寂な風景を表はし、神社をとれば佛閣をとる。追憶にふけてゐかと思へば歩みは現實である様に、其の變化が大きく感情の抑揚をつけて我が鎌倉を美化し情化してゐる。着想の面白いのは七百年の沈黙を守りつゞけてゐる大銀杏に物語らせたいと「問はゞは遠き世々の跡」等の表現形式をもつて來た事や韻をふくんでゐる點では「しづのをだまきくりかへし。かへしし。人をしのびつゝ」。「盡きせぬ親王のみうらみに」等て、懸詞としては「くりかへし」「山門高き松風に」の「高き」等であらう。而も鎌倉にふさはし素朴な山門に剛健な松をもつて來た所に味ふべき情趣が伺はれる。

以上述べた様に、歴史に表現に、解釋に其の研究すべきものを混一の世界にとりまとめて讀んだ時其處に眞なる味ひが得られるのではないだらうか。私はかうした観め方をした後、總てを胸にふくんで讀んで見たい。そして其處に生れる感想はたゞ颯々と吹く松風と雨雪にさらされた墓に残る過去の鎌倉に切々たる愛着と追慕の情に思ひを致すものである。

一、目的 一語に過去と現在と實景と感想とをこめて作られたこの韻文鎌倉を讀ませて、我が鎌倉の深みと情趣を味はせ追憶の情と愛郷の精神とを讀會せしめたい。

二、教材區分及び時間目的

第一時 全課の通讀と歩んだあとを調べ、兒童の既有知識の發表と新出文字の取扱をなす。

第二時 初めから二十七頁五行までを精讀することによつて歴史的背景の研究と文表現の解釋により鎌倉のもつ深みを味はせる。

第三時 二十七頁六行から終りまでの内容研究と表現研究とをなし全文を總括して朗讀により郷土鎌倉についての追憶の情を味得させる。

一、準備 鎌倉の繪はがき及地圖

一、教授過程

第一時

○今日は私たちの住んでゐる鎌倉です。讀んで來ましたか

板書事項

1 指名讀 二、三名

讀みついて質問はありませんか
何か感じた事はありませんか

第一直觀の發表

2 挿繪の取扱

○何處の繪でせう——兒童の既有知識の發表

○この繪は文のどこをとつたものですか

○書き出しはこの繪でせうね。この七里が濱を見る前にどこを見て來たと
思ひますか

3 歩みの跡の研究

○どんな順序に見て行つたのでせうか

○範讀——意味がとり易い様に

(稻村崎、一名將の劍投せし古戰場。)

(長谷觀音のく堂近く、露坐の大佛おはします)

……等に注意して

わかりましたか。其の順序を言つてごらん下さい。——默讀によつて吟味

七里が濱

稻村崎

← (名將の劍投せし)

○どこから書き出してありますか

指名讀 (順路研究の主なる問ひ)

1 大佛のことを何故「露坐の大佛」といつたのでせう

2 ここから八幡宮に來たのですね。どうした路順で

3 八幡宮で目にふれた殊に感じたものは何んですか

4 八幡宮からどこへ行きましたか

悲憤の涙とはどんなことですか

5 親王とはどなたですか、英雄とは誰を指しますか。どうして頼朝であるこ
とがわかりますか。

6 次に行つた所はどこですか

○板書文字のよみ

4 整理

指名讀

大體どんなことが書れてゐましたか。

どんな感じがしましたか

第二時

第五篇 實 際 篇

極樂寺坂

長谷觀音(の)近く

露坐の大佛

→ 由比が濱

雪の下

八幡宮

大いふ

若宮堂

鎌倉宮(悲憤の涙)

英雄の墓

建長・圓覺寺

○この録倉は誰が開らいたのですか、どんな所が有名です。

○読んで見ませう。——指名讀

何か感じた事がありますか

○今日は二十七頁五行迄研究して行きませう。

1 指名讀 (二十七頁五行まで)

2 八幡宮へ行くまでの間てわからないことがありますか

(いそ傳ひ、おはします)……等の語句について

3 稻村崎で「名將の劍投せし古戰場」と思ひ浮べましたね。どんなことがあつたのでせう。……發表

4 大佛や觀音様はどうして有名なんてせう

5 由比の濱邊、雪の下についての思出を想起せしむ

6 そこまでを讀んでいたさませうね

7 八幡宮で特に心に深く感ぜられたものは何ですか

8 五句六句を齊讀と解釋

△「上るや」とはどんな意味ですか(きざはしの説明)何を見たのですか

△どんな感じがしましたか

階段

上るや石のきばしの

聞いてみたいものだな

問はばや遠き世々の跡

願望

源實朝↑公曉

うさいはか

枕言葉

しづのをだまきくりかへし

かへしし人をしのびつゝ

くどのき

「問はばや」の意味、ばやとがなとが同じ様な意味を持つこと

△殊に其の中で有名なのはどんなお話ですか

△若宮堂では何を思ひ出したのでせう。この若宮堂にはどなたがお祭りして

ありますか

こゝで舞を舞つた靜御前はどんな人でした

△どんな時に舞を舞つたのでせう。補説——

9 靜御前を思ひうかべながらどこへ行きました

△「悲憤の涙わきぬべし」といつたのは何故でせう。誰れの感じてせうか

△「べし」の意味はでせうかもつと強い意味になりますか。——兒童の感じに

より

○文を口語譯にする

各句毎に

○表現法の研究

○調子、韻をふんでゐる所。懸詞

倒置法↓等について

○朗讀の指導

靜御前

悲憤の涙わきぬべし

盡きせね親王の

みうらみに

いしやく

○感想發表——整理

第二時

○この前はどんな事を習ひました

○どこが一番深く感じました

○一回読んでいたゞきませう

○今迄の所を普通の文に直してごらん下さい

◎今日は次を調べて全體をまとめて行きませう

1 指名讀——全文一回、八句九句一回

2 八、九句で意味のわからない所はありませんか

—(解釋の質問から入つて行つてもよい)

3 鎌倉宮の歸りに見た所は

4 英雄とは誰でしたか。其の墓はどんなになつてゐますか

(挿繪取扱↓天下を掌握せる大事業と比較)

5 何故こんなに淋しい墓となつてゐるのでせう

6 頼朝亡くなつてから何年位になりますか、そして其の間にどんな事が起りましたか。

ゆめの様にはかないもので

興亡 すべてゆめに似て

英雄墓はこけむしぬ

山門高き松風に

昔の音 やもろらん

しのぶ

若宮堂—○きのどく
大いてふ×かはいさう

實景寺—○りつば

稻村崎—×忠義
鎌倉宮—×くやしい

墓—×ゆめ

○印は興

×印は亡

源氏の滅亡、鎌倉幕府の滅亡—七百年

武家政治の崩潰と王政復古

7 頼朝が生きてゐた頃にあつた事は何んですか

8 源氏が滅亡したのはどこに書かれてゐますか

9 北條氏の頃建てられたものは何んでせう。

10 北條氏の滅亡はどこに書いてありますか

11 足利氏の世になつて涙をそゝる事は

(わからぬ事があつたら其の度に讀ませる)

12 さあかうした興亡は何によつてしのだのですか

13 遠い音を考へながら故人の寝むる建長、圓覺の古寺にまゐりますとどんな

感じがしますか、

14 昔の音とは何をさしますか、

○表現の研究、

「高き」が懸詞であることや「らん」と第一課の「らむ」との比較

全文の朗讀

○この文の中でどこが中心でせう

○朗讀指導

感想發表

—整理—

五分間テスト

参考資料

土のむろや 太平記より

時行の兵に追われて鎌倉を逃れた直義は、すでに山の内を打過ぎた頃、伊賀守を召してこういひつけた。「今鎌倉を立ち去つても、何れ又取り返す時もあらうが、唯心にかゝるのは當家におわす大塔宮のことばかり、勅許はなけれど汝之より引き返して宮をば殺し參らせよ。」「かしこまつて候」と答もあえず、淵邊の主従七騎は、くつわを揃えて引返し、宮のおわします土牢の前うかがいよる、宮は晝も夜もなき闇の世に燈火をかゝげ端坐して讀經に餘念なくおわします。淵邊は外より聲をかけ、「淵邊の一族、主人直義の命により、お迎にまいつて候。」と申し上げる。宮はそのものくしき様子をごらんになり、「さてこそ汝ら、わが命をば失はんと來しならん、心得たり。」とばかり、やにわに淵邊の太刀を奪わうと走りかゝらせ給うたのを、淵邊は太刀を取り直し、お膝のあたりをしたたかに打ち牽つた。長き年月此の土牢におし込められ給うて、衰え果てた、大塔宮は、心わはやれど、力及ばずよろめくところを淵邊は得たりとおどりかゝつて宮のお胸に乗りかゝり、腰の刀を引きぬいてお首をかゝうと突きかゝる。宮はお首をちぢめて刀のさきをしかとおさえ遊ばされる。刀は折れた。

淵邊はさらに脇差をぬいて先づ、御胸原のあたりを二刀ばかり刺し通し、刺されて宮が弱らせ給うを、御髪をつかんで引き上げながら、遂にみしるしおかき落す。

淵邊は外に走り出た。見れば宮には刀のきつ先一寸ほどをまだ御口のうちにかみしめつつ、生きてる人のように、淵邊の顔をにらみつけて居給うた。淵邊はあまりの恐しさに、「かよの頸を主人に見せぬがよいぞ。」と、つぶやきながら、かたわらなる、藪の中に投げ捨てたまゝ、急ぎあわてゝ逃げ歸つた。

おかいしやくの爲、常日頃御前にお仕え申して居た南の方は、さき程からの有様に身も魂もうちふるえ、手足も立たずに打ちすくんで居たが、やがて人心すいて外に出て投げすてられた御頭を取上げかい抱きて「夢かうつか、夢ならば早くさめよ。」とばかり泣き悲しんだ。

靜御前。

四月八日の朝となりました。

一天晴れ渡りて、風さえ靜てあります。人々は爽かなる氣持で灌佛會の賑いを見に、群り立ちて、八幡宮へとただれ込むのであります。

鶴ヶ岡では従二位右大將源頼朝御臺所政子を側近く伴い、その左右には、大名小名勇、豪傑、綺羅星の如く、威儀を正しく居並んで居りました。頼朝は笑を含みまして「工藤祐經、汝は勇士の家に生れ、弓矢を取つての豪の者じやが、歌や舞にも心得が深いと聞く、今日の舞に鼓を打てよ。それから畠山重忠、汝は武勇並びなく、鎌倉第一の強者じやが、平素優雅しい道にも勝れて居るといふ噂じや、丁度幸い銅拍子を致せよ。」こんな事を言つて居ります中、今日は鶴ヶ岡で日本一の舞手が男舞を舞うそうだと、どうして漏れましたものか、その噂を聞き

傳へくた人々は、潮の如く群つて來ました。そして八幡宮の廻廊の邊はまるで人の山を築いたようであり、「來たくそれ來たぞ。」といふ聲が、群集の中から一人、二人、五人、十人と波のように、それからそれへとひゞき渡りました。

やがて三挺の輿は、徐に降されました。一番目の輿からは、工藤祐經の妻が現れました。次は磯禪師、最後の輿から優かに立ち出ましたのが人々のまちこがれた花のような美しい静であります。四邊の様子で、怜悯な禪師と静とは、これは甘々欺されたと感じましたけれどももうどうする事も出来ません。それで静は、静々と神前に進みまして、そこで伏拝みながら、夫義經の武運長久を心から祈りました。

祈願が終りますと、頼朝から案の定、舞の催促がはげしく出ました。静は決心しました。

つと立ち上つた姿は、白の小袖に白の袴、黒いつやくした長い髪を高く結びあげ、雪の様に白い面には少し紅味を潮し、その凛々とした涼しい眼で、恐氣もなく、名ある勇士の人達を眺め廻した態度は天晴義經の妻でありました。

心には無量の憂を包み、面には愛嬌を湛えて、いざ舞に掛らんとする時、誰か静を可哀そうと思はぬ者がありません。祐經の鼓、重忠の銅拍子は一つ一つ續いて妙な音締めを出した。静の手からわ、もえるような紅の扇がさつと開かれました。雪の袖が、靜に翻えたと見る間に摺足も軽く、秋は時雨の紅葉の羽袖、冬はさえゆく雪の秋、天つみ空の緑の衣、地には春たつ霞の衣、朝日名日に照り映えて、靡きおき伏す花衣、見る人々の眼光を惚惚とさせながら、見事に一曲舞ひ終りますと、

吉野山峰の白雪ふみわけて、いりにし人の跡ぞ戀しき。

賤やしづの苧環くりかへし、昔を今になすよしもがな。

鈴を振つたような、云ふに云はれぬ涼しい聲で、二度までもこの和歌を高らかに繰り返しました。

並居る勇士を始め、重なり合つて見て居りました群集は唯一人感じ入り、嘆美の聲をもらさぬものはありませんでした。一人頼朝は顔を真赤にして怒りました。

「不埒な女ぢや惶れ多くも八幡宮の神前で、謀叛者の義經を慕ひ、和歌に事よせて源九郎を昔に戻したいなど

いふは不都合な奴ぢや。」

火のようになつて四邊かまわず、怒鳴り立てゝ居りましたがそこは女の政子、流石に靜の不運を憐れと思ひ、その境遇に深く同情して居た際でありますから、

「御腹立は御道理でございますが、靜の身になつても考へ遊ばしたら、お和歌も無理は無理事と御承知が出来ましょう。あのやさしい心があればこそ女でございます。あの心のない女は男には、邪魔者でございます。悪魔でございます。まさかあなた様は悪魔のような女がお氣に入りといふ譯はございませんまいの。」

女でこそあれ、政子は思慮も深く見識も高い人物でありました。それに頼朝が石橋山で旗揚げをした前後から、頼朝の影身に添うて政子が盡した骨折は、並大抵の事ではありませんでした。そんな事情からして頼朝も政子には日頃不手に出て居る位でありますから、今もこういわれて見ると、心の底は兎も角、表面だけでも政子の辭に従わない譯には行きません。

「それもそうじや。」何となく力のない返事を頼朝は仕方なくしました。

「あなた様は、もうお忘になりましたか知れませぬが、豆州にお出なされました時、私はあなた様の御身を案じ、暗の夜の大雨も物ともせず、あなた様の御邸へ参り、事の危急をお知らせ申した事もありました、それからあなた様が石橋山へお出掛けなされた後で、私は一人豆州に留り、あなた様のお身の上を、どれ程氣づかつた事でありましょう、そこに女のやさしい心がございます。

女の誠は、その優しい心の中に籠つて居るのでございます、その女らしい心、私等のもつて居ります心を静が持つて居るのを、不埒だと答めるのは答める人が無理でございます、貞女をお責めになる所は、すこしもあるまいと存じます。」

こんな工合に政子一流の淑雅なうちに、凄いような強味を持つた詞で、靜に慰めましたので、一つは昔の事を並べられるのがうるさくもあり、また高が女の詞尻を捉へて、癩癩玉を破裂させたと見られては、思慮分別富んだ畠山を始め、並居る勇士の面々に對しても面目ないとも思ひましたものか、「ハッハ……」と頼朝は殊更に作り笑をしまして、

「兎も角今日は、何時にない面白い舞を見た、あの手振り、あの足取り、靜とやは日本一じやの、取つて附けた様にいつて、一同をジロ／＼見廻しました。

雨になるか、風になるか、雲行を心配して居ました一同は始めてホツとしたらしく其の日はそのまゝ何事もなくすみました。

一〇、實 用 文

舊師に呈す

一、日 時 昭和十一年二月五日水曜日

一、學 年 尋常科第六學年女組三十六名

一、教 材 尋常小學國語讀本卷十二第二十四課 舊師に呈す

一、教材觀

會つて小學校で教へを受けた先生に出した手紙である、小山君が呉服屋に勤める様になつてからの毎日の状態がよく表はされてゐる。

毎日々々先生にお手紙を出したいとは思ひながらも今日まで延び／＼になつた事、それは實社會に生活してはじめて知る苦しみであつた。「わからず」「氣をもむのみにて」「情なく」のことが眞なる告白であつた。それ故一日一日と延引したので、心の中には師に對する懐しさと深き感謝の念がみなぎつてゐたのである。この心が上田君に出會つて「先生はお丈夫かい」「あゝいつも元氣だよ、そして君のことをいつも小山は其の後どうしてゐるだらうか等お聞きになるよ」等の話に先生の御壯健さを喜ぶと共に先生のお心が嬉しく涙ぐんだのに違ひなかつた、かうした事から恩師に對して筆をとつたのであつた。小山君の氣持は小學校の前を通る度に郷里の舊友恩師に對する情が涌き起つて先生なつかしさの氣持が日頃くり返へされてゐたのであつた、それが上田君に出會つた事によつて、此の手紙となつたのであつた。このなつかしさの氣持と同時に深き感謝の念がこの文の中心想を

なしてゐる。この感謝の念には二つある。「我ながら情なく存じ候」の氣持となつて來た時、先生からの御教訓が弱き心を追ひやつて一心に働くことが出來たこと、ほめられをば先生の御恩であるといふ二つである。「これも。」とある所に教訓と賞讃とを含めて居ることを知るのである。而してこの先生の御恩を無にしまい立派なものとならうといふ意氣は「いよく仕事に勵み」「親に安心」等のことばによつて表はされてゐる。かうした心「いよく御なつかしく」「深く感謝致居候」の中心想を此の手紙のうちから汲みとつて本課の使命を果したい。本文の表面的な目的は御無沙汰のおわびかたぐい近況を知らせるのであるが、其の生命は前述の心である。これが内面的な目的であり、眞なる目的である。かうした手紙を讀んだ先生はどんな氣持がしたらうか。教育は永遠のものである。卒業後の兒童迄に精神的な糧を與へて補導して行くのが教育者の道である。大井先生が如何に眞摯な氣持でこの返事をかゝれたか私共には想像が出来る。師弟一如の世界に居るうつくしさ、こゝに一層本文の精彩が加つて來る。

次に文の機構について研究してみよう。

拜啓、誠に御無沙汰に打過ぎ御許し下されたく候
 前文
 百十九頁九行迄
 先づは——敬具 百二十一頁から終迄——後文
 本文
 百十九頁十行から百二十一頁十行迄

となつて手紙の三段形式をとつてゐる。前文が挨拶であり、後文が終りの挨拶であり、本文がこの手紙で言はうと思ふ事が書れて居るのである。この課は尋常科最後の手紙文であるから、かうした形式も充分に頭に入れておく必要がある。

次に文字表現の上からみて、本課は行書の候文である所に特色がある。今後の實生活にはほとんどが行書である所から行書の讀み書きが相當に出来る様に指導しなければなるまい。殊に本に於ては横書と連絡をとるべきものには延(延)御、御、由(御)處(處)等(學)後(後)等(勸)等であり。候文については色々の感想もあるが、たゞ實用文として現在も商用、公用、儀式用等に相當使用されて居る處からみて、候文を正しく解釋し實際生活に困らぬ迄にしておきたい。これが最後の候文である所から總括の時に候の使ひわけを比較して授けておく。

- 1 發信人と受信人との有機的關係を讀解せしめる。
- 2 發信人の心の動きを讀みとらせる。
- 3 受信人の讀後の感想を正して本文を賞讃する。
- 4 表現形式の研究

○候文は正しい口語に、

○本文に具備されべき要件、心情、様子等を適確に讀解せしめる。

○手紙文の組

5. 綴り方への連関

等に注意しながら取扱つて行きたい。

一、目的 舊師に御無沙汰をお詫び傍々近況を知らせる手紙より、恩師に對するなつかしさと感謝の念の深さとを讀會せしめ、謝恩の念を養ふと共に手紙文の形式を授く。

一、教材區分と時間目的

第一時 全文の通讀

發信人・受信人の關係、大意の把握、手紙文の組立の研究、雜語句の意味、讀みの研究（發音アクセント）新出讀替文字の取扱。

◎第二時 全文の精讀（味讀）……本時取扱

文の精神の自證、語句のいみを確實にしてそれを通して、なつかしさ、深き感謝の念とを讀みとらせる。

讀みの指導（語の抑揚調子）

第三時 全文の眞讀（朗讀）

鑑賞、形式の指導、語句の應用練習、漢字の復習、朗讀指導

指導過程

○舊師に呈すすね、（板書）

「呈」の字に注意して書きなさい、口に呈の字ですよ。——兒童書寫、どんな意味でせうね。さうさしてさしあげることですよ、何をさしあげるのてせうか。——手紙ですな。誰に指あげるのてせう。——舊師とは——前に教へを受けた先生ですな。あなた方の舊師はどなたですか。

○通讀指導

1. 指名讀 二、三名、讀みについての質疑應答

2. 行書と楷書との關係指導

3. 新出文字の取扱ひ（聽寫）

筆順、讀み意味の取扱ひ

伺ひ、延引、忙しく、御教訓、勸定

○大意把握

1. 何が書いてあつたか調べませう。——指名讀

2. 話合

イ、發信人と受信人との關係

ロ、雜語句の研究

ハ、何を知らせたのであるか

ニ、どんな氣持でこの手紙を書いたのであらうか

等について

◎文の機構の研究

1 範讀

2 本文の「いよく御なつかしく」「深く感謝致居候」等の發表だけである時は文の前後の所をしつかりととりあつかひ、本文との関係を見させ手紙文の組立を直観させる。

◎第一次直観の想定

どんな氣持でこの手紙を書いたかの答へと本文との関係を見させて内省讀をなす。

◎整理板書により

◎第二時

舊師に呈すしてしたね。先生にお手紙を出した事がありますか、もう六年ですよ。このお手紙がどんなにあなた方の爲になるか今日もよく讀んでいただきます。

◎第一次直観の發表

どんな氣持でこの文が書かれたのでしたか。指名讀、自由發表（なつかしく感謝の心）

◎文の心の研究

讀み——話合——讀み——話合——讀の過程によつて、

「いよく御なつかしくこの心はどうして起きて來たのであらうか、いよくこの語に注意の眼をむけ」「上田君に出會ひ久しぶりに郷里の様子を」を親友から聽いた、それが總てなつかしいものであつたが殊に先生の語に

うつり上田君から「小山君はどうしてゐるだらう」と「常に」お話をさつて居られる先生の様子を書く時なつかしさがたまたまなくなつて來たのであつた。小山君の「なつかしさ」の情はこれだけでは「いよく」の語が生きて來ない。上田君と出會ない前から先生に對してどんな氣持で居つたかを見出すことによつて其の心持が深つて行く冒頭の文から「御伺ひ申上げたしとは存じながら」の言葉を讀みとらせ「小學校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど」思ひ出されてゐた小山君であつた。而も學校の前を通る度といふ事を「は」の字から見出させる。かうした「なつかしさ」の心が上田君に出會つた事によつて「いよくなつかしさ」を増して行つた。又「仕事に追れて」ゐる身でありながらも手紙を書かうとした。そこには「いよく御なつかしく」心ばかりではなく「深く感謝致居候」氣持も強かつたのである。「私のこと御心に」のことはから現在生活の喜び「ほめられ申候」の氣持をかち得た所に深き感謝の情がわき起つて來る。其處に小山君の純情さをながめなければなるまい。又どうして感謝の情がより深まつたか、そこに眼をむけることは近況を見ると同時に必要なことである。現在生活に入つた當座と現在までの心境の變化を「わからず」「氣をもむのみ」「情なく」思つたのが會つての教訓を思ひ出して「忍耐が第一」と思つて「一心に働き」「興味を覚えるやう」になつたので、こゝにこの教訓に對する感謝の念を見出すことである。「これも全く先生のおかげと」とある様に第一の感謝の心は教訓に及んでゐるので「何時もほめられ申候」は計算の達者になれた先生の指導に對しての感謝である。かうした尊い氣持を讀みとらせて「いよく」仕事に勵み「親に安心」を與へる強い意志が植ゑつけられた事をよみとらせる。以上の取扱ひを圖解してみれば、

○「いよく御なつかしく」

1 私のこと御心に

御伺ひ申上げたし

2 おもしろかりしことなど

○深く感謝致居候

1 ↓興味を覚ゆるやう

「忍耐が第一」

「わからず氣をもむのみ」

2 ほめられ申候

3 此の上は

○文意の確認、——指名讀——

○朗讀指導

右に圖解した様なことを強め、殊に「いよく御なつかしく」とか「深く感謝致居り候」等の語には實感をこめて強く讀む。

○第三時

○この手紙は誰がどなたに出した手紙でした

板書事項

○どんな関係のある人でせう

○鑑賞

1 指名讀どんな氣持で書れてゐるか

2 話合

○小山さんの氣持はどんなことばで一番よく表はされてゐますか

○氣持を強めて居る一つ／＼のことばはどれでした

○この文で一番自分がよく書けてゐると思ふ所はどこでせうね

○これを讀まれた先生はどんな氣持でせうか

3 感想發表——朗讀後

○朗讀指導

○形式指導

1 手紙文の組立

2 候文の使ひわけ

3 難語句の取扱

4 漢字行書、書取扱

整理 直讀直解をめざしての朗讀により
テスト (五分間)

第五篇 實 際 篇

てつよに等

舊師に呈す

御無沙汰に打過ぎ——前文

いよく御なつかしく

1 常に

2 學校

深く感謝致居り候

教訓

計算

先づは……後文

大井先生、小山文太郎

文 本

第六篇 結論

現代教育者に最も必要なことは現實をみつめて將來ある兒童を眞の日本人たらしめんとする理想と信念する。新日本民族の現在並びに將來に對して誤りなき道をたどり得る人物を作り、國家百年の大計を圖るにある。彼の明治維新の大業の生れたのは何によるか。設備不完全な寺小屋教育を受けた人々によつてなされて來た。それはたゞ彼等が魂の教育を受けて來たからである。

魂の教育こそ眞の日本人を作る道である。魂の教育は何によつてなされるか。國語を愛することである。國文の世界に踏觀することである。教師の信念に基づくものである。

教育者たるものは燃ゆるが如き愛國心の所有者であると同時に確固たる信念を持たなければならない。自己を磨き現實をみつめ、過去から現實への進展を觀めて、日本精神文化の發揚に力める。そこに^行の世界が生れる。行する事が眞なる精神文化發揚になる。

讀方教育は讀みから書く、書く事により讀む、そこに感想知識を得る^行の世界が常に行はれ、自己の生命進展に務めて居るものである。讀書三到の眼に到り、口に到り、心に到る、世界はやがて^行の世界となる。我々はたゞの理想家であつてはならない。行する人であつてこそ眞なる教育が出来るのである。

日本精神涵養の讀方は心から行にまで到るのを理想とする。よりよき日本人を作り、皇國の發展と國民の幸福とを願つて力説するものである。

以上

編輯後記

一年餘りの研究をまとめて見ると、實に大部のものとなる。この大部の研究が我々の歩み來たつた過程であつて、何んだが一言一句に深い感激を感じさせられる。

春が徐々に近づいて來る様に我々の蒙も段々開られて行く様な気がする。充實した授業を念願しながら實際指導に兒童をぐんぐん伸す爲の努力が毎日繰り返へされて行く、どの教室に入つても兒童の自發的活動が目立つて來た事も嬉しい。

國語教育史は我々の進路をはつきりと見定める大切な研究であつて、我が國独自の教育法がはつきりとして來た様な気がする。たゞ淺學不才の我々の研究であるから完全なものでないことは遺憾である。而し益々この研究を完成にと近づけて、將來への基礎を固めようと思ふ。

實際篇の研究はほんの一部分で、他に記録として残されたものは随分あるが費用の関係上全部を掲載出来なかつたことを職員各位及び參會者諸賢に深くお詫びする。

教育ははらのある人を作らなければならない。日本人としてのはらのある人を作る事が最も緊要なことである。讀方學習がこの方面に重大關係を持つて居る事を思ふ時、我々の向上意識は益々燃え上つて來る。

熱と愛の教育を心から後援し、この發表のため、精神的援助の上、物質的援助をお與へ下さつた清水莊平氏の陰徳を深く感謝すると共に、かうした後援者を得た我々は唯一筋に向上の道、よりよき日本人を作る教育行に精進しようとするのである。

昭和十一年二月二十日印刷
昭和十一年二月廿七日發行

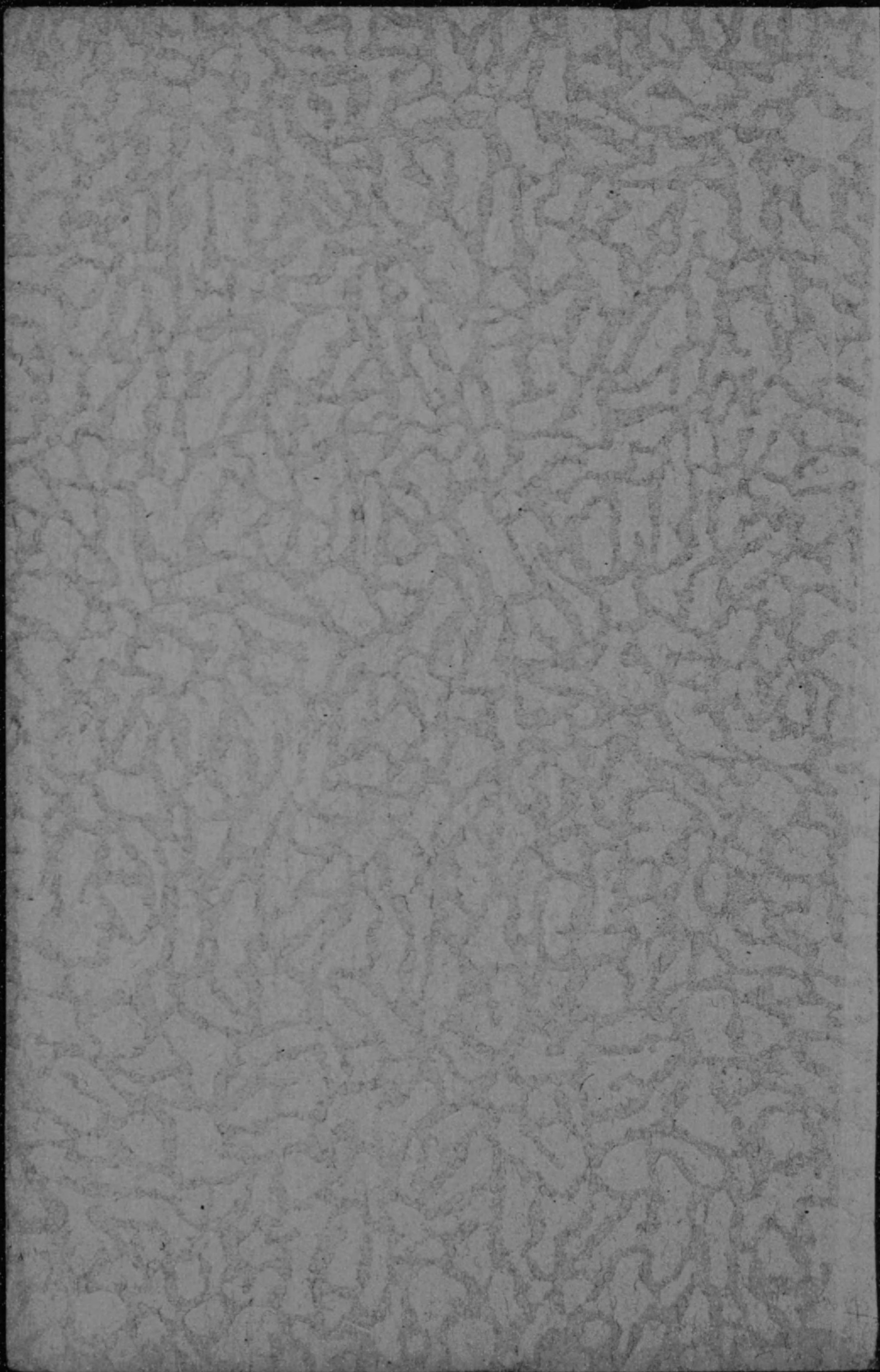
【非賣品】

神奈川縣鎌倉町二階堂第二小學校內
江 端 嘉 郎

印刷人
神奈川縣鎌倉町長谷三十二番地
三 橋 左 一 郎

印刷所
神奈川縣鎌倉町長谷三十二番地
鎌 倉 印 刷 所

發行所
神奈川縣鎌倉町二階堂
鎌 倉 第 二 小 學 校



THE UNIVERSITY OF CHICAGO
PRESS

CHICAGO, ILLINOIS

1963

100 EAST HAWTHORNE AVENUE
CHICAGO, ILLINOIS 60605

PRINTED IN GREAT BRITAIN
BY THE UNIVERSITY PRESS, CAMBRIDGE

ISBN 0 226 00111 1

